

[研究ノート]

死の社会学の展開 ——死の表象研究に向けて——

國本 哲史

0 はじめに

現代は、医療の発達により、死にゆく（dying）期間が長期化し、人々は死について、以前の時代よりもより多くの関心を持つようになってきている。こうした背景の下で、死についての研究はそれぞれ蓄積を重ねてきた。

社会学も、その始まりから、Durkheim などによって死（自殺）を扱ってきたが、特に1960年代から70年代にかけて、大きな変貌を遂げる。この時期に、「死の社会学」の古典と呼ばれる、Barney G. Glaser と Anselm L. Strauss による、“Awareness of dying”（1965=2015）や、David Sudnow の “The social organization of dying”（1967=1992）などが登場し、病院の中でみずからの死に直面した「終末期患者」にまつわるふるまいが研究された（森岡 1996：223-32）。

これらの各研究者の個別的な動きの後で、1990年代に、イギリスで「死の社会学」を扱った論集がいくつも出版されるようになり、死を対象とする社会学が一つの研究領域として成立する（澤井 2015：15）。時を同じくして、日本でも、副田義也が、2001年に初めて「死の社会学」という表題を持った書物を刊行し（副田 2001：viii）、これを皮切りとして、このテーマに関するいくつかの論集や著作が出版され始めた。2012年には、『社会学評論』に、テーマ別研究動向として、株本千鶴による「死の社会学」の紹介も掲載され（株本 2012）、日本においても、「死の社会学」は社会学における一つの領域として、ほぼ確立しつつある。

このように、近年日本においても注目され始めた死の社会学はしかし、未だ駆け出しの領域であり、その境界や内実は確定的なものではない。こうした背景の下、本稿は、今後の「死の社会学」の展開の方向性を模索することを目的とする。

1 死の社会学の先行研究

Glaser と Strauss や、Sudnow らが病院での死を研究し始めた背景には、当時のアメリカ社会の社会問題が存在する。それは、病院の中で死を迎える人の増加に伴い、末期患者に対して、どのように対処すればよいか、特に、「自己決定」の問題に関連して、末期患者への告知をどうするか、といった実践的な問題であった。

彼らは、先例が殆ど無い中で、インタビューや参与観察、エスノメソドロジーといった手法を駆使し、死にまつわる実践的なデータから、議論を行った。その議論は、社会に大きな影響を与え、医療・保険分野の実践家、特に看護師やソーシャルワーカーの必読書となったほか（Glaser and Strauss 1965=2015：vi）、学問的にも現在に至るまで、死についての議論の前提的な知識となっている。

日本においても、「死の社会学」と分類可能な研究は、彼らの議論の系譜に連なっていることが多い。副田が編纂した日本で初めての「死の社会学」の論集においても、彼らの議論を当時の日本の文脈に置きなおしながら、ガンの告知や、瀕死者の感情表出類型を扱ったものがある（加藤 2001、嶋根 2001）。

Glaser と Strauss らの古典的な研究は（特に病院における）患者と、その関係者の間の相互行為に関心が向けられていた。それとは別に、「死の社会学」には「死別」という対象についても議論の蓄積がある。死別についての研究は、精神科医である Erich Lindemann に始まる（Lindemann 1944=1984）。彼は、死別に際した遺族の「悲嘆作業（grief work）」の伝統的で医学的なモデルを提示した。これはたとえば、「遅延」や「歪曲」した悲嘆反応は「病的」であるとするもので、「病的」な悲嘆は、「正常」な悲嘆へと変化させることが可能であることから、「病的」な悲嘆者はケアの対象となる。この伝統的なモデルに対して、社会学者を含む人々が批判的なまなざしを向けてきたことで、「死別」に関する研究が蓄積されることとなった（鷹田 2015：29）。

日本でも、「死別」についていくつかの研究がある。社会学の領域で「死別」を中心的に扱っている澤井敦によれば、「死別」はこれまで精神医学や心理学の領域で扱われてきており（澤井 2015：16）、それらは、死別に伴い経験される心理や感情としての「悲嘆（grieving）」を対象とする一方で、「死別の社会学」は、死別という現象に対する社会的な対応・対処を広い視野から問題化する（澤井 2015：19）。

こうした社会学的な視点に基づき、澤井は「死別の社会学」に関わる多様なテーマについての論集を編纂した（澤井 2015）。そこでは、妻との死別という自分自身の経験をデータとして、死別、および悲嘆にどう向き合っていたのかが自己分析されているもの（有末 2015：118-143）や、死別を経験した人たちの、心的外傷後成長（Posttraumatic Growth）に注目する研究を、大学生からとられたインタビューデータにより検討しなおすというもの（米田 2015：173-99）など、興味深い論文が多数収録されている。

病院の中での相互行為、死別（とそれにかかわる悲嘆）以外にも、「死の社会学」にはもう一つ、特徴的な対象がある。それは、死や死別についての語りである。

語りを対象とした研究も、日本においていくつか行われている。代表的なものは、副田らの「死別体験の博物誌」（副田・加藤・遠藤 2001）や、中筋由紀子の『死の文化の比較社会学』（中筋 2006）、立岩真也の『良い死』（立岩 2008）が挙げられるだろう。副田らは、震災で肉親を亡くした人々へのインタビューデータを分析し、日本でよくみられる死への意味づけを分類した。また、中筋は、小説などを媒体として、日本の死の文化を、アメリカや中国など、他国のそれと比較する。そして立岩は、日本で議論が活発化している「尊厳死」を推進する人々によって語られた「良い死」を取り上げながら、それを批判的に分析した。

2 死という対象をどう考えるか

これまで紹介した「死の社会学」には、いくつかの批判が考えられるが、たとえば、現象学者の渡辺恒夫は、これまでの死についての学問＝死生学が「死にゆく当事者を他者として見守り支援する側の、対人援助の技術の学としての発展が、中心になっているように見える」と述べ、「ほ

かならず私が死ぬ」ということこそが死の謎であり、これを解き明かすことを努力すべきことが主張されている（渡辺 2017：i - iii）。これは、死の社会学に対して部分的に当てはまる批判である。確かに、たとえば Glaser と Strauss らの研究が、死それ自体についての理解を深めてくれるものでなかったことは認めるべきだろう。

これは、生命や、生活、生涯など、様々な形で人間の「生」と関係してきたこれまでの社会学が、必ずしも、死について扱ってきたわけではないという武川正吾の指摘（武川 2008：11）とも重なるところである。社会学は前節で見たように、次第に死と隣り合わせの生や、死にゆくこと（dying）に関心を持ってきたものの、未だ死それ自体を対象としたことは殆どない。

死が不可知であることは認めるとしても、社会的に構築された「死」であれば、社会学はそれを扱うことができる。死の社会学がこれまで、こうした意味での「死」を対象として蓄積を殆ど行っていないことは、批判されるべき点である。

死の社会学が私たちの「死」を解明することができれば—その解明は渡辺の指摘する課題に十分に答えたことにはならないかもしれないが—死の謎の解明に一定の輪郭を与えることになる。というのも、私たちがどのような「死」を語り、その下で、どのように「死」を考えているかということは、私たちの死の経験の一部を構成するものであるからである。

「ほかならず私が死ぬ」ことは、ある時空間においては喜ばしいことであるかもしれないし、ある教義の下で自明のこととなっているかもしれない。ある時空間において、どのような「死」がいかにして構築されているのかを解明することは、死の謎を考えていくときの重要な手掛かりになる。

筆者は、社会的に構築された「死」に対するアプローチとして、死の表象を扱うことを考えている。このアプローチは、上述した死についての語りを対象とした研究と多く重なる部分がある。

たとえば副田らの「死別体験の博物誌」は、阪神淡路大震災による震災遺児家庭170世帯を対象として、インタビュー調査を行い、そのデータ（対象者の語り）をもとに、いくつかの分析結果をまとめている。その一例が、家族の死への意味づけのパターンである。副田らによれば、対象者の語りには、「①死にゆくいわまのきわの人間、あるいは死んだばかりの人間の靈魂には強い超能力がある。②ある人間が死ぬさい、その人間が愛している別人を生かすために、身代わりとなって死ぬことがある。③死は靈魂のあの世への旅立ちである。④二人以上の家族がいっしょに死ぬのは、あの世へ連れ立ってゆくほうがさびしくないからである」という四つの意味づけのパターンが見られた（副田・加藤・遠藤 2001：159-61）。

たとえばこの意味づけの類型について、研究をさらに発展させていくことで、社会的に構築された「死」について、議論することが可能になるのではないだろうか。なぜなら、これらの意味づけは、私たちの死についての見方、つまり死生観の一部を表すものでありながら、同時に、副田らもその可能性を指摘しているように⁽¹⁾、伝統的で、それゆえに社会的な構成物であるからである。つまり、これらのパターンが見出されたという「事実」に端を発して、次に、「なぜ、対象者は①から④のような意味づけのパターンを語ったのだろうか」、「なぜこれらのパターンが少なくとも日本のその時期（1995年）に多く語られたのだろうか」、「これらのパターンは、死を超えて、他の現象の意味づけにもかかわる何らかの基底的な要素を有してはいないだろうか」などと問を立てることによって、私たちが死について考えたり、語ったり、さらには何らかの印象を持ったり、感情を生起させたりすることについての理解につなげることができる可能性がある。

しかし副田らの研究は、こうした問を立てることはなかった。彼ら自身が正確に指摘しているように、この研究はあくまで事例研究である（副田・加藤・遠藤 2001：137）。一つの論文として、このような限定をかけることは賢明であるが、その後も、彼らがこの事例研究から死それ自体について議論を立てた形跡はない。彼らに限らず、「死の社会学」は、事例研究が多い。確かに、一定の死のタブー化が存在する以上、死に関する事例研究は意義深いものであることは間違いがない。しかし、事例研究の先にある社会的構成物としての「死」について考えることは、一事例にとどまる話ではなく、さらには死というテーマすら超えて、人間が語るということや、何かが社会的に構築されるということといったより広いテーマを考えることへと、自ずと行き着くものだ。死はそうした可能性を持った対象なのである。先に紹介した語りに注目する諸研究は、その「死」という対象の可能性を十分に捉えきれていない点で、不十分さを残している。

副田自身、死の社会学を大変広く定義しており、様々な研究があっべきであるにもかかわらず（副田 2001：はじめに）、現状は事例の紹介・分析という非常に偏った、狭い関心の下で研究が進められている状況だと言える。そのため、死の社会学は、まだまだ拡張・展開される可能性を秘めている。むしろ拡張を行わなければ、死の社会学は、死という（現代にとっては特殊な）対象を扱う周延的な学問領域にとどまらざるを得ず、死という対象の持つ可能性を無下に捨て去ることになるだろう。

3 社会的表象としての死

そこで筆者は、死を社会的表象と考えることで、社会的構成物としての「死」を考察していく方途を提案したい。社会的表象とは、社会的相互行為によって確立する言語的な意味世界を表す、フランスの社会心理学者、Serge Moscovici によって創始された社会的表象理論に由来する概念である。

社会的表象理論は（1）広義の社会的構成主義に属しており、社会的現実の成立、すなわち、われわれにとっての意味を帯びた世界の成立を、考察の主題としている。

（2）意味の世界、すなわち社会的表象の世界は、われわれの社会的な活動を通して、具体的には、言語を用いた談話的過程を通して、現在あるような姿へと構成される。

（3）いったん構成された意味的世界、すなわち社会的表象の世界は、個々人としてのわれわれ、および、その認識や行為全般を規定するものだと考えられている（八ツ塚 2001：101）。

筆者の考える研究は、副田らの研究と同じように人々の語り（小説などのテキストも含む）を対象としながらも、社会的表象理論に依拠することで、その焦点を、事例の理解から死についての意味世界の探求へと移行させている⁽²⁾。

これは、死という対象が持つ、これまであまり注目されてこなかった部分に対して、焦点を合わせようという試みである。

死という対象は、実体としては存在せず、言語的に作り出された表象であり、真なる死の表象というものは未だに定まっていない。また、すべての人間は、死を経験して語ることはできず、すべての人間の条件が同じである。さらにはいくつかの宗教団体を除いて、死生観や死後についての観念を、その構成員の実際的な利害関心と結びつけている組織・団体も考えにくい⁽³⁾。こうした理由から、死についての人々の語りは、他の対象に比べ、比較的制約の少ないものであると

仮定できる。

たとえば、ある政党の政治家は、その政党の強い締め付けによって、正しさの表象をあまり自由には語れないかもしれない。もし、彼らの正しさの表象を研究する場合には、彼らにどのような実質的制約が課せられているのかを考慮に入れなければならなくなり、その考慮が十分なレベルに達したかどうかの判断は大変難しいものにならざるを得ないだろう。

一方で、死は、死についての語りに影響を及ぼす要因として考えられる事柄が、他の表象と比較して、意味的世界内にとどまっている可能性が高いと考えられ、そのために死の表象は、純粹に表象、つまり意味的世界の研究を可能にする優れた対象であると考えられる。

つまり、社会的表象理論の下で、社会的に構成された「死」を研究するということは、死の表象を研究するということであり、それはすなわち、死を対象にはしているが、その最終的な目的地は、私たちの意味的世界と、私たちの現実（認識や行為全般）との間の関係を考察することにつながっている。筆者は、このような方向性で、死の社会学を拡張することを提案したい。

では、死の表象研究はどのように行えるのか。この点について、同じく社会的表象理論に則り研究を行った、人類学者 Mary Bradbury の“The representations of death”（以降『死の表象』）を参照し、具体的な研究の方針を示したい。

4 「死の表象」研究

4.1 事実—表象次元

『死の表象』は、死の表象について中心的に扱った数少ない研究の一つであり、死の表象研究にとって、大変重要な先行研究となる。

彼女自身は明確に言及していないが、『死の表象』は表象研究の3つの方針を示している。本章ではこれを紹介したい。

3つの方針とは、それぞれ、表象に関わるが完全には重なることのない、「事実—表象次元」、「表象それ自体の次元」、そして「表象—行為次元」である。

事実—表象次元とは、表象が我々の行為に影響を与えるものであると考えられる限りにおいて、現実の諸実践の中に溶け込んでいるはずである表象を扱う次元である。たとえば、Bradbury は、死に関わる多様な実践者（医師、看護師、警察、検視官、葬儀屋、聖職者など）の実践に焦点を当てている。

その記述の中で、以前の看護師は、患者の介護をする家族にお茶でも飲んでくるように勧めたが、現在では、患者のそばにいてあげてくださいと勧めるようになったり（Bradbury 1999 : 54）、聖職者の説法の時間が、聴者の時間を浪費せぬよう減少し、内容も変化（天国へ行けるという死の喜びから、死の悲しみへ）したりしていることが紹介されている（Bradbury 1999 : 89-90）。一見、単に調べた結果（事実）を列挙しているだけに見えるこれらの記述は、同時にその実践に含まれている死の表象を記述していることにもなる。

Bradbury が死別について次のように述べていることは、すべての表象研究にとって重要な視点を与える。「パートナーの死によって人々の上に降りかかる強大な実践的制約を強調することなしに、死別の記述は完成しない」（Bradbury 1999 : 175）。実践の内部で働く表象は、実践それ自体の影響を受けることは間違いなく、この次元の表象を扱うことなしに、表象研究は完成し

得ない。

4.2 表象それ自体の次元

次に、表象それ自体の次元を見ていきたい。Bradbury は、現代ロンドンの「良い死」の表象を記述する。彼女によれば、それは3つのタイプに分類できるという (Bradbury 1999 : 146)。一つ目は「聖なる良い死」 (=SGD: Sacred Good Death) である。その特徴は、宗教的死生観 (魂の不死性や、輪廻転生) のもとで、死の床 (ベッド) が重要視されることと、死が社会イベント化されていることである。たとえば、Bradbury がインタビューした女性は、家の中で家族に囲まれ、好きな音楽を流し、シャンパンをあげ、その良くなされた生を祝いながら自身のベッドの上で最期を迎えた夫の死を「完璧だった」と表象する⁽⁴⁾。

二つ目が「医学的な良い死」 (=MGD: Medical Good Death) である。その特徴は、医学的に完全にコントロールされていることである。それは、大抵痛みなく、意識もない状態での死である。医学は死それ自体を扱えないため、死に至るまでのケアに重きが置かれる。

この死は、SGD と同じように、死をコントロールしようとするが、それが麻酔や薬剤投与によるため、SGD に必要だった個人の強さがなくなっている点で異なる。また、いつ、どこで死ぬかある程度コントロールできる点も「良い死」となる可能性を高めている (Bradbury 1999 : 149-51)。

そして最後が「自然な良い死」 (NGD: Natural Good Death) である。Bradbury がインタビューした女性は、ボート事故によって目の前で溺死した夫の死をある種の「美しさ」があったと述べる。なぜなら、彼女によれば、医学的な死のように何か月も不快さと痛みに苦しまなければならないような死と違って、その死は素早い死だったからである (Bradbury 1999 : 152)。

Bradbury は、NGD の特徴を、反-MGD であると考える。そもそもこの良い死の表象は、医療に介入されず死ぬ権利を求めた運動と強い関係を持っている (日本でも「自分らしい死」が流行している)。そのため、受動的な患者の役割を負ったまま死ぬことを拒否し、痛みの除去より、人間の尊厳、そして死に行く人のパーソナリティを重視する特徴が見られる (Bradbury 1999 : 154-5)。

この死は、MGD を拒絶するが、MGD もまた、NGD と交わることはない。というのも、20世紀に入り、医学は死と病気を結び付けたが、その医学にとって、死は、病気を治すことの「失敗」以外の何物でもなかったからである。医学にとって、死を「自然だ」とみなす余地は生じえなかった (Bradbury 1999 : 153)。

一方、この死は、SGD と明確に異なる。NGD はあくまで死にゆく人に重きがあるため、SGD を構成する魂の不死性などの根本の信仰が存在しない。中には聖職者に頼らず、生前に自ら葬式をセッティングする者や、棺をエコのためにリサイクル材で済ませるものもいる (つまり死にまつわる事柄が非常に俗的である)。NGD は信仰を持つ者からすれば彼らの信仰を愚弄する表象でしかないが、無神論者からすれば、SGD もまた、無意味で愚かな表象に他ならない。

Bradbury は、このように3つの現代ロンドンにおける「良い死」の表象を記述した。ここには表象自体の秩序が描かれている。3つの表象はそれぞれ絡み合いながら、「良い死」の表象世界を構成しているのである。SGD と MGD は親和的であり、NGD は MGD に対抗する。SGD と NGD もまた、その根本的なところで対立し合う。そこには、「良い死」の表象自体に内在する安

定的な関係性という意味での秩序が存在する。この表象的秩序は、表象研究にとって欠かすことのできない対象である。殆ど人間主体が関与しないこの秩序により、我々の行動が影響を受けている可能性がある。しかし表象的秩序は、それ自体を目的にした研究を行うことなしに発見することはできない。

4.3 表象—行為次元

そして、最後に表象—行為次元である。表象研究は、表象の実際の影響力を考察するために、表象と人々の行為の間の関係を扱わねばならない。

Bradbury は、現代でも強い影響力を持つ、Lindemann による悲嘆の医学的モデルと、人々との間の関係についての記述を行っている。表象は人々に影響を与えるとしばしば考えられているが、実際どのように影響しているのかを議論しているものは多くはない。

Bradbury はインタビューデータを用いて、悲嘆の医学モデルの流通を記述する。インタビューである女性たち自身は、医学モデルのメタファーを用いて自らの悲嘆を語った。そのソースは、メディア、医療関係者、そして先に死別経験をした人が担う (Bradbury 1999 : 171)⁽⁵⁾。

そして、こうした表象を初めて受け取った悲嘆者（特に死別経験者から話を聞く場合は徒弟関係のようなものが生じ、真に受けやすくなる）は、その医学モデルと自身の悲嘆とを照応し、当惑したり、不安を感じたりする。そして、その医学モデルの表象に合わせて、「健康」を感じたり、いくつかのネガティブな側面を自他に対して隠してしまったりするようになる (Bradbury 1999 : 172)。

悲嘆の医学モデルは、悲嘆を非社会的で個人的な悲しみや苦悩だと考える傾向がある。たとえば表象のそうした特徴が、同じ男性、インタビューの女性にとっては夫であり、彼女の子供にすれば父親を亡くした後の、悲嘆の非共有（子供は女性と父親のことを話すのを拒み、引きこもってしまう）という結果を生じさせもする (Bradbury 1999 : 173)。こうした表象に従った行為が社会の中で広がれば、表象の個人に対する妥当性が強まり、その影響力が増すことは想像に難くない。

こうした、どちらかといえば表象に対して受動的な役割を演じていた人々の行為の記述のほか、Bradbury は、表象を能動的に扱う人々の記述も行っている。

たとえば、葬儀を取り仕切る葬儀ディレクターは、その指導的立場を維持するために自身の印象を管理する (impression management) とされる (Bradbury 1999 : 184)。彼らは、自身の印象管理が失敗した経験を多く語ることで、その失敗を同じ立場の人間と共有する。そのことを通して、この業界全体の指導的な力の維持を図っている。また、悲嘆者も同じように印象管理を行っており、表では「健全に」悲しむことをしていても、裏では取り乱したり、故人の幻覚を見るなどしたりしているのである (Bradbury 1999 : 185)。日常的に使用される「表と裏」という考え方が成立している現在は、人々が表象に対して能動的にかかわる能力があることを証明している。

Bradbury のこれらの記述から、表象と人々の行為との間の複雑な関係が垣間見える。人は表象に受動的に従うこともあれば、能動的にそれを使いこなすこともある。表象と人間の行為との間の関係性については、現状、盛んに議論されているとはいいがたく、この次元は表象研究にとって、今後も意識的に考えていかなければならない領域である。

ここまで、Bradbury の『死の表象』を、3つの次元に分けて参照してきた。これらは、

Bradbury 自身に把握されていた区別ではなく、それぞれの記述に、それぞれの次元が混在して記述されている。Bradbury にとって、この本で行ったことは表象研究ではなく、表象を用いた死の研究であったのであり、彼女に責任があるわけではない。しかし、その記述の大枠は確かに3つの次元に区別が可能であり、それは理論的に見ても、表象の異なる側面を映し出していると考えられるのである。

5 まとめ

Bradbury の研究は、意図せず今後の表象研究の方向性、および可能性を示していた。しかし、表象研究として彼女の研究を観察すると、問題がないわけではない。ひとつは、データが示されていないため、反証性に開かれていないことが挙げられる。たとえば彼女は良い死を3つに分類したが、本当にそのような分類で正しいのか、我々は少なくとも『死の表象』から読み取することはできない。

または、データと表象との関係をどのように考えるのかといった議論もなされていない。ある一つのデータが得られたとして、そこに見いだされる表象は、表象世界全体においてどのような意味を持つのだろうか。こうした点は、今後の表象研究も考えていかななくてはならない点である。

本稿は、死の社会学が事例研究にとどまっている状態を批判し、社会的構成物としての「死」を扱う方法として表象に注目する方向性を示した後、Bradbury の『死の表象』を参照して、その具体的な研究方針を考察してきた。

こうした方向性で死の社会学を展開・拡張することで、死は特殊な事例研究の対象から、私たちの意味的世界のメカニズムを解明するための重要な対象となり、死の社会学も、私たちの表象・意味に関する社会的事実について探求する領域となる。

しかし、これはまだ提起的な段階に留まるものであり、今後実際に研究を蓄積していく中で、理論・方法論それぞれをより磨き上げていく必要があると考えている。

注

- (1) これらの意味づけのパターンを、副田らは、「つぎのような考えかたは、日本文化のみに固有のものであるとまでいう準備はないが、その伝統的・民族的深層に発するものである」としている（副田・加藤・遠藤 2001：159）。
- (2) 本稿で例に挙げた中筋や立岩の研究に対しても、社会的表象理論に基づく本稿の研究方針は、(批判的) 拡張・補足になっていると考えている。たとえば、中筋は小説から日本の死の文化を描いたとするが、社会的表象理論は、われわれの社会的活動と意味的世界を切り離して考えない。その小説が、現実の私たちとどのように関わっているかを考察することなしに、そこで描かれている死が日本の死の文化だと、中筋のように結論することはできないと考える。また、立岩の研究は、彼の取り出したある時空間の諸言説の批判が主となっており、そもそもの目的が異なっているが、彼が取り出した諸言説が、私たちの社会でどのように流通しているものであるかについて、社会的表象理論は経験的な方法を与えてくれるはずである。
- (3) ここで言っていることは、ある死生観を採らなければコミュニティから疎外されるといったことや、必要な社会的諸権利を受け取ることができないなどの、死生観を実際の活動と密接にかかわらせているような組織・団体である。そうした集団は、一部の宗教団体を除いて、少なくとも日本においてはあまり多くはない。

と考えられる。

- (4) 注意しておきたいことは、SGD は医療の力によって、彼がそれまで苦しんでいた痛みを取り除いてもらうことができ初めて可能になるため、Bradbury は、現代ロンドンの死の表象における、SGD と、医療の密接な関係性を指摘する (Bradbury 1999 : 147-8)。
- (5) この人から人に表象が語り継がれるという表象の性質が、細部の変化をもたらし、表象の多様性を説明する (Bradbury 1999 : 171)。

文献

- 有末賢, 2015, 「配偶者との死別と再婚」澤井敦編『死別の社会学』青弓社, 118-43.
- Bradbury, Mary, 1999, *Representations of Death*, Oxford: Routledge.
- Glaser, Barney G. and Anselm L. Strauss, 1965, *Awareness of Dying*, New York: Aldine Publishing Co. (= [1988] 2015, 木下康仁訳『死のアウェアネス理論と看護』医学書院.)
- 加藤朋江, 2001, 「ガン告知と家族」副田義也編『死の社会学』岩波書店, 3-26.
- Lindemann, Erich, 1944, "Symptomatology and Management of Acute Grief", *American Journal of Psychiatry*, Vol.101 (2) : 141-8. Reprinted in: Robert Fulton ed., 1978, *Death and Dying*, California: Boyd and Fraser Publishing CO. (=1984, 斎藤武・若林一美訳「悲嘆—症候と処置」『デス・エデュケーション』現代出版, 176-88.)
- 株本千鶴, 2012, 「テーマ別研究動向(死の社会学)」『社会学評論』Vol.63 (2) : 302-11.
- 森岡正博, 1996, 「「死」と「生命」研究の現状」井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『病と医療の社会学』岩波書店, 223-38.
- 中筋由紀子, 2006, 『死の文化の比較社会学』梓出版社.
- 澤井敦, 2005, 『死と死別の社会学』青弓社.
- 編, 2015, 『死別の社会学』青弓社.
- 嶋根久子, 2001, 「死にたいする四つの感情表出類型」副田義也編『死の社会学』岩波書店, 27-67.
- 副田義也・加藤朋江・遠藤恵子, 2001, 「死別体験の博物誌」副田義也編『死の社会学』岩波書店, 137-92.
- Sudnow, David, 1967, *Passing on: The Social Organization of Dying*, New Jersey: Prentice-Hall. (=1992, 岩田啓靖 志村哲郎・山田富秋訳『病院でつくられる死』せりか書房.)
- 鷹田佳典, 2015, 「イギリスにおける「死別の社会学」」澤井敦編『死別の社会学』青弓社, 28-53.
- 武川正吾, 2008, 「生と死の社会学」武川正吾・西平直編『死生学3 ライフサイクルと死』東京大学出版会, 9-22.
- 立岩真也, 2008, 『良い死』筑摩書房.
- 渡辺恒夫, 2017, 「「死一般」でなく「私の死」を謎として自覚するための実験実習」渡辺恒夫・三浦俊彦・新山喜嗣編『人文死生学宣言』春秋社, 5-16.
- ハツ塚一郎, 2001, 「社会的表象研究の実際と方法論的検討(1)」『総合研究所所報』Vol.9 : 101-16.
- 米田朝香, 2015, 「死別体験をとらえる視線」澤井敦編『死別の社会学』青弓社, 173-99.

[査読を含む審査を経て、2018年7月20日掲載決定]

(一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程)